



米子市埋蔵文化財センターたより

第52号

2024年3月



小町越城野原第11遺跡の発掘調査の終了

令和4年10月から実施してきました伯耆町小町の小町越城野原第11遺跡の発掘調査は令和6年3月27日に終了しました。

今回の調査では、縄文時代晩期（約3200～2400年前）の陥し穴（おとしあな）、7世紀前半の竪穴建物跡、段状遺構、7世紀後半の横穴式石室（古墳）を検出しました。

縄文時代晩期には、陥し穴4基を検出し、この時期の土器が多量に出土しました。越敷山周辺ではこの時期の陥し穴が数多く見つかっており、当遺跡周辺でも狩猟活動など、この時期の人々の活動が窺えます。

7世紀前半には、竪穴建物跡や段状遺構が見つかっており、集落が形成されます。調査地のうち、南側の丘陵では丘陵の先端で竪穴建物跡が5ヶ所で見つかっております。各竪穴建物跡は、同じ場所に1～2回の建て替えを行っているのが特徴です。また、集落は竪穴建物跡5棟で構成されていたことが明らかとなりました。

7世紀後半には古墳が築造されます。古墳（横穴式石室）は3基見つかっており、いずれも丘陵の南側斜面に位置します。横穴式石室はいずれも小型の石室で、古墳がつくられなくなる直前の様相を呈しており、古墳時代終末期（7世紀）の横穴式石室の構造等を考えるうえで、貴重な資料を得ることができました。なお、横穴式石室3では、遺体の両耳に相当する位置から銀環（銅に銀メッキを施した耳飾り）が2点出土しました。（高橋）



横穴式石室3出土の銀環



横穴式石室3

発掘調査情報

－ 出雲街道跡 －

令和6年1月から2月にかけて伯耆町三部に所在する出雲街道跡の発掘調査を実施しました。出雲街道は、松江藩主と母里藩主が参勤交代で使用した街道で、三部地区の北側にある丘陵の南側の裾の現在の町道がそのルートであると推定されています。

令和3年度に伯耆町教育委員会が実施した試掘調査では、町道の路盤が非常に硬くて人力では掘削することができず、出雲街道の路面を確認することができませんでしたが、その法面が崩落するのを防ぐための土留めの石が並べてありました。

今回の調査では、出雲街道の法面が調査範囲から外れていたため、土留めの石は調査できませんでしたが、出雲街道の路面と考えられる硬化面を確認することができました。路面には石や砂利は敷かれてはいませんでした。上部の約5cmが硬く締まっており、丘陵の裾を削って道路の平坦面を造成し、路面を突き固めたか、あるいは頻繁な往来によって踏みしめられたと考えられます。調査の結果、現在の町道は出雲街道の跡を利用してつくられていると考えられ、現在の町道が出雲街道のルートであった可能性が高まりました。(下高)



出雲街道跡の路面

整理室たより

－ 根雨原土手下夕遺跡出土の大形石製品の実測 －

整理室では、令和4年度に発掘調査を実施した伯耆町根雨原に所在する根雨原土手下夕遺跡から出土した大型の石製品の実測を行っています。これらの石は長さ45～80cm、幅16～26cm、厚さ15～25cmもあるもので、実寸大で正確に図化しなければなりません。重くて持ち上げるだけでもたいへんな重労働ですが、さらに、石の上面だけではなく、側面や下面も実測しなければならず、その度に石をひっくり返して移動させて実測しました。たいへん苦勞の多い遺物です。(高橋)



大形石製品

遺跡シリーズ 寺内8号墳 (てらうち8ごうふん)

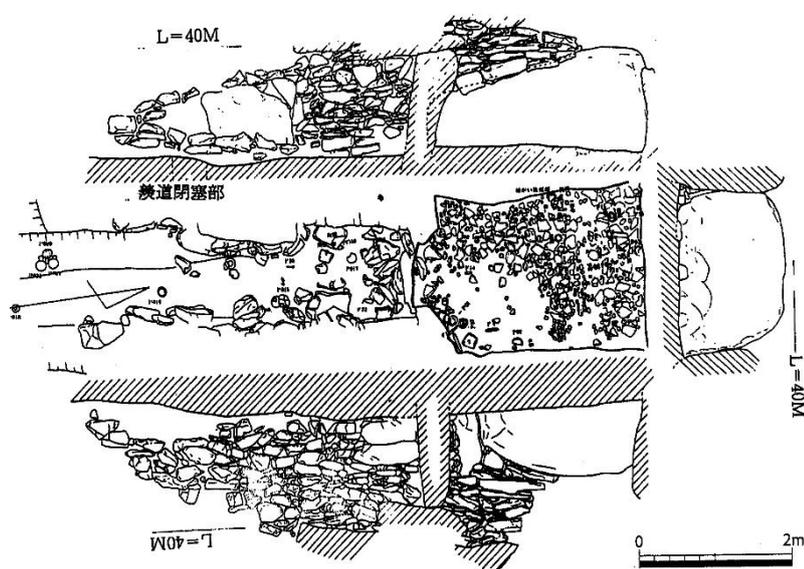
寺内8号墳は、南部町寺内に所在し、北側へのびる丘陵の先端部に位置し、西側の別の丘陵では三角縁神獣鏡が出土した普段寺1号墳があります。

古墳は以前より石室が露出しており、土地所有者の牛舎の造成工事等で一部が破壊されていました。土地所有者の牛舎の増築及び隣接地の削土工事に伴い、昭和60年に会見町（現南部町）教育委員会によって発掘調査が行われました。

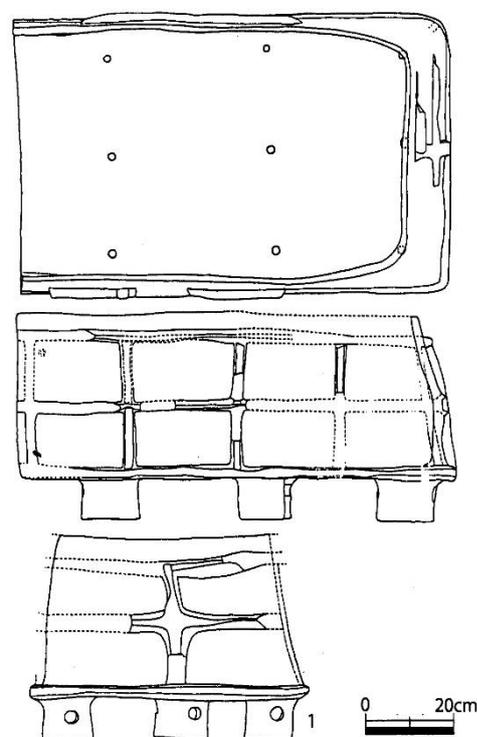
調査の結果、古墳は直径10mの円墳で、その周囲に周溝が巡っているのが確認され、出土した遺物から6世紀後半に築造されたことが明らかとなりました。埋葬施設は横穴式石室で、その平面形態は羽子板形を呈しており、玄室は長さ3m、幅は奥壁側で3m、前壁側で1.9m、高さ1.6mを測ります。羨道は長さ2.5m、幅1.1m、高さ1.3mを測ります。玄室の床面には2層の須恵器の大甕の破片などを敷き詰めて屍床としています。石室の石材のほとんどが要害山周辺の凝灰岩で、一部に越敷山周辺の玄武岩が使われています。

遺物は、須恵器、土師器、円筒埴輪、土師質の亀甲形陶棺、鉄刀、鉄鏃、刀子（とうす：ナイフ）、耳環（じかん：耳飾り）、玉類が出土しています。また、人骨と歯が出土しており、男性の可能性があると報告されています。

出土遺物として特筆されるのが土師質の亀甲形陶棺です。近畿地方や岡山県の古墳時代後期（6世紀）の古墳でよく見られるものですが、形態から畿内型のものと考えられ、畿内との関係が窺えます。また、県内で形がある程度復元できる陶棺としてもたいへん貴重な資料です。



石室図



土師質の亀甲型陶棺

センター・資料館日誌

2月 6日（火） 倉吉博物館が上淀廃寺跡出土の壁画の調査で来館。

2月 14日（水）～3月 31日（月）
福市考古資料館企画展3
「米子の考古名宝展」を開催した。



福市考古資料館 企画展3

2月 15日（木） 島根県古代文化センターの東森氏が目久美遺跡出土の大型壺と絵画土器、大谷遺跡出土の絵画土器の調査で来館。

2月 22日（木） 尚徳小学校3年生が古代学習・古代体験で来館。

2月 27日（火） 木下熊本大学名誉教授が福市遺跡出土の異形土器の調査で来館。

2月 28日（水） 島根県立古代出雲歴史博物館の久保田学芸員が石州府古墳群出土の須恵器と上淀廃寺跡出土の瓦の借用で来館。

3月 5日（火） 韓国 韓神大学の李南珪教授が埋蔵文化財センターの見学で来館。

3月 7日（木） 北海道大学大学院の久井准教授が目久美遺跡出土のタンチョウツルの骨の調査で来館。

3月 9日（土） 第2回考古学講演会「古墳に時代について」を開催した。

3月 24日（日） 史跡ガイドウォーク「向山古墳群」を開催した。

3月 25日（月） 米子市文化財保護審議委員会が研修室で開催された。

3月 27日（水） 鳥取大学の高田教授が日原6号墳と日下25号墳出土遺物の調査で来館。

編集後記

今年の冬は例年のない暖冬で、発掘調査では寒さに凍えることも少なく、比較的快適に作業をすることができています。しかし、1月下旬の大寒波では大雪が降り、積雪が50cmと多いため作業が8日も中止となりました。また、埋蔵文化財センターの駐車場の除雪は、毎年、職員が総出で行っていますが、今回はあまりにも積雪が多いため、たいへん苦勞しました。

発行日 令和6年3月29日

発行者 米子市埋蔵文化財センター

指定管理者（一財）米子市文化財団

電話 0859-26-0455

Eメール yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp